

国立国語研究所学術情報リポジトリ

「 ϕ なら」の考察：
ナラ条件節との関連を視野に入れて

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2022-01-21 キーワード (Ja): キーワード (En): nara, nara-conditional clauses, factual conditional sentences, conjunctions 作成者: 宮部, 真由美, MIYABE, Mayumi メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00003510

「ゆなら」の考察 ——ナラ条件節との関連を視野に入れて——

宮部真由美

鳴門教育大学

要旨

この論文では、「なら、早く着替えてきなさい」のように「なら」の前に句や語をとまわずに用いられる「なら」について分析を行なった。分析の結果、この「なら」は「なら」のあとにつづく内容が推論によるものだとすることを積極的に示しつつ、相手（聞き手）がそのような内容の発言をしたことが「なら」につづく発話内容の根拠であるということを表わし、かつ相手のその発話内容が、それをうけて発話する話し手の発話の動機づけ、そして発話内容の条件やきっかけとなっていることを表わすというはたらきをしている。また、話し手の問いかけ・確認要求に対して相手の返答がない場合、あるいは返答を待たずに発話をつづける場合は、話し手は相手が同意・肯定しているものとして、そのことを「なら」でうけて、後ろの自分の発言へとつづけていることがわかった。

接続詞「それなら」との対照から、「それなら」と「なら」は先行する発話が相手（聞き手）のものではなく話し手自身の場合に、「それなら」はその自分の発話内容をうけるが、「なら」はうけないという違いがあることがわかった。このことから、「なら」が接続詞としては「それなら」と同じレベルのものではないということがわかった*。

キーワード：句や語をとまわらない「なら」、ナラ条件節、事実的条件文、接続詞

1. はじめに

この論文では、(1) のように「なら」の前に句や語をとまわずに用いられる「なら」について分析していく。「なら」が用いられる文は、条件節の「～なら」¹ が用いられる文と似ており、「なら」の前に句や語をとまわずに用いられる「なら」はナラ条件節から派生したものと考えられる。

(1) 理子「面接 行くの？」

黒崎「…ああ」

理子「なら早く 着替えてきなさいよ」

黒崎「わかってる このメール 読んでから…」

(電撃デイジー)

* この論文は国立国語研究所の共同研究プロジェクト「日本語学習者のコミュニケーションの多角的解明」(プロジェクトリーダー:石黒圭)の研究成果であり、日本語/日本語教育研究会第12回大会(2020年9月28日、オンライン開催)にて口頭発表した「ナラ条件節の複文の「事実的条件文」を再考する一文頭の「なら」の分析を手がかりに—」に加筆修正をくわえたものである。

¹ 以下では「～なら」の条件節のことを「ナラ条件節」とよぶ。

(1) のような「なら」を接続詞として位置づける先行研究もあり、高橋太郎ほか (2005) は「まえの文の内容が、あとの文が成立するための条件やきっかけであることをあらわす」接続詞として分類している。しかし、このような「なら」について詳細に述べる研究は管見の限りみあたらない。

一方、多くの研究があるナラ条件節は、前田直子 (2009) がレアリティの点からナラ条件節のほか、タラ条件節、ト条件節、バ条件節の複文について分析し、ナラ条件節の複文は「事実的な反事実条件文」「事実的な仮説条件文」「仮説的用法」「反事実的用法」「反復・習慣条件文」² に用いられることを述べている。

有田節子 (2016) は条件節による複文を「予測的条件文」「認識的条件文」「総称的条件文」「事実的条件文」³ 「反事実的条件文」の5つにわけるとして、(2), (3) のようなナラ条件節の複文を「条件節事態が成立したかしなかったかが発話時点で定まっていて、話し手がそのどちら、つまり成立したのかしなかったのかを厳密には知らない状況で、その条件をもとにして自らの判断や態度を主節に表すような複文」(2016: 14) と規定し、「認識的条件文」とよぶ。

- (2) (昨日ガンバ大阪の試合があったけれど、結果はどうだったんだろうか。) もし、ガンバ大阪が勝った(ん)なら、J1リーグに残留する可能性があるんだが。

(有田節子 2016: 16 より引用)

- (3) A: 明日はソレントに行くことにしたよ。

B: そうなんですか。ソレントに行く(ん)なら、ポンペイにも寄ったらどうですか？

(有田節子 2016: 16 より引用)

(2) は発話時点ではガンバ大阪の勝敗は決まっているが、話し手はその結果を知らない⁴。(3) は発話時点でAさんがソレントに行くことは未来のことだからなので、ソレントに行くことが成立するかどうかはわからない。そのため、(2), (3) のナラ条件節のことがらは「成立したのかしなかったのかを厳密には知らない状況」で述べられたものだと有田節子 (2016) は述べる。

しかし、有田節子 (2016) の5分類では、(4) のようなナラ条件節の複文がどこに位置づくのかよくわからない。(4) では、「口動かすなら 手エ動かしな!!」の話し手は、目の前で文句を言っている(口を動かしている)相手を見て発話している。

- (4) 品川 「つーか何で 俺こんなこと やってんだ!!」

花の祖母 「口動かすなら 手エ動かしな!!」

(ヤンキー君とメガネちゃん)

² ここにあげた名称は前田直子 (2009) のものである。

³ 有田節子 (2016) の「事実的条件文」はスルトやシタラによる複文で、「学校についたら、雨が降ってきた」のような過去のことがらを述べる複文である。

⁴ (2) のような従属節に過去の知らないことがらをさしだす複文は、ナラ条件節以外でも表わすことができる。前田直子 (2009: 45) では「過去における推論過程」としてバ条件節の用例があげられており、宮部真由美 (2015: 183) では「想像による発話時以前のことがらをさしだす」ものとしてタラ条件節の用例があげられている。

鈴木義和（2015）の分析は従属節に事実的なことがらがさしだされる条件節の複文に関する先行研究を概観したうえで述べるものである。鈴木義和（2015）では（4）のナラ条件節の複文は「事実的条件文」に位置づけられる。

先行研究からわかるようにナラ条件節には仮定的なことがらも、事実的なことがらもさしだされる。さらに、ナラ条件節の複文では、（5）のような主節のことがらが従属節のことがらに対して先行するような時間関係となる場合も表わすこともできる。（5）のような時間関係となる文はタラ条件節、ト条件節、パ条件節の複文では表わすことができない。

（5） 透「ただいま～～」

母「あら 透？ どうしたの 帰ってくるなら メールくらい くださいね～～」

（ライアー×ライアー）

ナラ条件節の複文に関する研究は、ほかの条件節の複文との比較・対照による研究や、個別的な研究など分析が豊富にある。しかし、ナラ条件節の複文の仮定性、事実性という点や、（5）のような他の条件節の複文とは異なる特異な点を総合的に述べるものはない。

（3）のように相手の発話をうけて述べたり、（5）のように目の前の相手の態度・様子をみて述べるという点は、本稿で述べていく「なら」が用いられる文にもみられる。この論文は「なら」の前に句や語をとまわずに用いられる「なら」について分析していくが、今後、ナラ条件節の複文を分析していくことも視野に入れて行なうことにする。

2. 分析に用いる用例と分析の観点

この論文での分析対象には「なら」のほか、「だったら」も含めた。基本的にこの二つは文法的には同じものだと考えている⁵。この論文で「なら」と記述する場合、「なら」だけでなく「だったら」も含んでいる。

「なら」は、「じゃあ」や「だって」のような接続詞と同様、おもに話しことばに用いられる。自然会話のコーパスで用例を検索したが、分析を進めるうえで十分な用例を採集することができなかった。そのため、シナリオの台詞、マンガの台詞からも用例を採集した⁶。表1に用例数を示す。また、分析では自然会話のコーパスは文脈がわかりづらいものが多かったため、この論文ではシナリオとマンガの227例を分析対象とする。

⁵「だったら なに」のように、うしろに「なに」が続く場合は「だったら」が用いられる用例が多かった。どちらかの形式がよく用いられるという組みあわせはあるように思われる。この点は用例数を増やして検討したい。

⁶ 自然会話のコーパスは国立国語研究所の「日本語日常会話コーパス」から採集した。

シナリオの32例は13作品から採集した用例数である。マンガの用例は2017年～2019年にかけて目視で採集した。デジタル作品からの用例や用例が見つからなかった作品もあったが、記録を残しておらず、総冊数は不明である。

表1 用例数

用例採集対象	用例数
自然会話のコーパス	26
シナリオ	32
マンガ	195

一般的に接続詞は「語形変化せず、独立語として文のはじめにおかれ、その文とまへの文とのいろいろな関係をしめす単語の種類である」(高橋太郎ほか 2005: 163)。基本的には文と文を接続するが、そのほかにも節と節、単語と単語とを接続する場合もあり、さらに段落をうけて、あとの文や段落につなげたり、相手の文をうけとったりする場合もある。そこで、「なら」について、どのように文、あるいは内容をうけているのかという点から考察を進めていく。その際に、話し合いの場面であるか、独話の場面であるかを考える必要があるが、今回は話し合いの場面の用例を分析していく。

3. 相手（聞き手）の発話との関係

(6), (7) のように、相手の発言（波線部分）をうけて述べる場合、「なら」が用いられる。

- (6) アヤメ 「先輩」
 椿 「な なに？」
 アヤメ 「昨日 松田先輩と椿先輩と一緒に居るところを見ました デートしてたんですか？」
 椿 「まさか！ たまたま会っただけよ 誰があんな奴とデートなんか…」
 アヤメ 「そうですか なら よかったです」 (アヤメくんののんびり肉食日誌)
- (7) 晶 「何してんのって 聞いてんの!!」
 黒沢 「おっきい声 出すなよ みんながびっくりするだろ」
 晶 「だったらちゃんと答えてよ！ 何してんの なんて 電話 出ないの!!」
 (ダメな私に恋してください)

(8) のような用例も採集された。(8) は高校のホームルームの時間に教師が放課後にクラスの出席簿づくりをする生徒を募っている場面である。教師は嫌そうな顔をしている生徒を指名しようとするが、爽子が「やります」と声をあげる。そして、それを聞いて、風早が「なら 俺もやる」と立候補するという場面である。爽子と風早の二人が対面で話している場面ではないが、話し合いの場面の参加者である爽子の発言を「なら」でうけるという点は (6), (7) と同じである。

- (8) 教師 「誰か 放課後残って 出席簿づくりしろ」「どーせ 立候補なんてねーだろうから勝手に決めるぞ」「誰が いちばんイヤソーな顔かな？」
 (みんなが困っている)
 爽子 「やります……………」

教師 「なんだ つまんねーの」

風早 (教師のことばにかぶせて)「あ なら 俺もやる」「ふたりでやったら あっとゆー
まだし」⁷ (君に届け)

(6)～(8) のいずれの例も相手の発言(波線部分)をうけて述べる発話の文頭に「なら」が用いられている。

また、「なら」は(6)、(8)のように対話の双方が同調的な発話場面にも、(7)のように非同調的な発話場面にも用いられていた。分析前の予測では偏りがあるのではないかと思っていたが、今回採集した用例には偏りはみられなかった。この点についてはさらに用例を採集して検証することにしたい。

4. 「なら」が用いられる文脈

「なら」が用いられる際の文脈に注目してみていく。

(9) は風早が連れてきた子犬について、爽子が風早に子犬とこれからも会いたいことを話している場面である。風早の「…なんだよ 犬だけ? 俺は?」(破線部分)という発話に対して、爽子が「もちろん 風早くんも! もちろん!!」(波線部分)と返答し、それをうけて「なら」が用いられている。

(9) 爽子 「迷惑じゃなかったら」「また… 会わせてくれるかな!」

風早 「…なんだよ 犬だけ? 俺は?」

爽子 「もちろん 風早くんも! もちろん!!」

風早 「なら オッケーーー!!」 (君に届け)

どのような文脈で「なら」が用いられているかをみると、(9)のような、「なら」の話し手による問いかけ(破線部分)が「なら」の発話よりも前にあるという談話パターンがよくみられた。このような談話パターンは、相手(聞き手)の発言をうけて述べる場合の用例194例のうち、104例にみられた。

また、(10)のように、問いかけではない場合もあった。(10)は質屋をしている志のぶのところに顕定がパールの宝石をもってきた場面である。「売らないほうがいいよ」(破線部分)という志のぶの顕定へのアドバイスとしての発言に対して、顕定が「行き遅れた長女が 家計が苦しいから 売ってくれて」(波線部分)と返答した内容をうけて、志のぶによる「なら」が用いられる発話がなされている。「売らないほうがいいよ」(破線部分)は問いかけではないが、相手(聞き手)はその内容に対して返答し、対話がつづいている。

(10) 志のぶ 「このパールは…」「売らないほうがいいよ」

⁷ マンガの用例の場合、同一人物がつづけて発言していても台詞の吹き出しが変わる場合がある。その場合はこの例のようにカギカッコをわけて書く。

顕定 「は？」「いや だから 命令だし 行き遅れた長女が 家計が苦しいから 売って
てくれて」
志のぶ 「なら なおさら!」「このパールは 何か女の人を輝かせてくれるというか…」
「きっと その長女さんに いいはずだから」 (七つ屋志のぶ宝石匣)

(11) では千秋の「なんで風呂!？」(破線部分)という問いかけに野田が返答し、野田のその発話内容(波線部分)をうけ、千秋の「だったら」ではじまる発話があり、その後も「なら」を用いた発話がテンポよく繰り返され、対話がつづいている。

(11) 野田 「お…」「お風呂かしてください…」
千秋 「はあ? なんで風呂!?」
野田 「ガスが止められちゃって お風呂に入れないんですっ 仕送りあしたで払えないし…」
千秋 「だったら あしたまで がまんしろよ! いつも入ってねーだろ!!」
野田 「あたま かゆくてかゆくて もう 限界なんです!!」
千秋 「水で洗え!!」
野田 「シャンプーもないんです」
千秋 「なら 石ケンで洗え!! オレを頼るな」 (のだめカンタービレ)

(9), (10), (11) をみると、相手(聞き手)の発話内容が、「なら」につづく内容(二重線部分)を発話する動機づけ、あるいは「なら」につづく内容(二重線部分)を引きだすものとなっている。たとえば、(9)は、相手(爽子)が「もちろん 風早くんも! もちろん!!」(波線部分)と発言したことが、話し手(風早)の「オッケーーー!!」(二重線部分)という発言を引きだしている。仮に爽子が「(風早くんは必要なくて) 犬だけでいいんだけど」と発言していたら、風早は「オッケーーー!!」とは返答しなかっただろう。また、このことは「なら」につづく発話内容が、相手(聞き手)の発話内容をうけ、それへの返答として述べられたものであるということでもある。そのため、「なら」につづく内容には、相手への命令((7), (11)), 許可(9), 念押し(10), 相手の発話内容に対する話し手の意志(8)やコメント(6)が表わされている。

5. 相手(聞き手)の発話がない場合

相手(聞き手)の発話がない場合にも「なら」が用いられる⁸。

(12), (13) の「なら」に先行する発話(破線部分)は、「なら」の話し手による対話の相手(聞き手)にむけた問いかける発話となっている。しかし、話し手は相手の返答を待たずに、自分の発話をつづけており、この発話の文頭に「なら」が用いられている。

(12) 練馬 「とにかく! これから殿大に結果を見に行くんだろ?」「なら さっさと 出発し

⁸ 分析対象とした227例のうち、33例がこうした例であった。

よーぜ！」

(ヤンキー君とメガネちゃん)

(13) 鮎喰 「最後に もう一つだけ 聞いてもいい？」

吉野 「リカとのこと？ だったらちょっと 長くなるけど。」(響～小説家になる方法～)

(14) の破線部分の発話は明確な問いかけではないが、相手（聞き手）に確認要求的な発話をしている。

(14) 元カレ 「ずっと駅で見かける綾華が好きで… でもオレなんかが声をかけられなくて
それを友達に相談したら オレが からんでやるから それを助けろって」「…
それにオレは 乗ったんだ」

綾華 「…でも」「そのあとの優しさは… 本当だったよね」「…だったら いいよ」「私
との出会いとかはいい！ 今までどおり やっていこうよ」 (王様に捧ぐ薬指)

(12)～(14) の場面は話し合いの場面であり、相手（聞き手）が存在する。しかし、話し手は相手にむかって自分の問いかけや確認要求の発話をしているが、相手からの返答を待たず、あるいは返答する前に次の自分の発話をつづけており、またこのとき、話し手は自分の問いかけや確認要求に相手が同意・肯定したものとして発話をつづけている。つまり、(12)～(14) の「なら」が用いられた文は、相手の明示的な発話はないものの、同意・肯定に相当する内容をうけて、自分の発言をつづけているといえる。

この同意・肯定ということについては、話し手が話の流れ（文脈）からそう思う場合、相手の態度・様子からそう思う場合、話を進めるために同意・肯定しているとみなす場合、相手の話に聞く耳を持たずにつづける場合など、さまざまな状況があると考えられる。いずれも「なら」の使用には、話し手による相手の同意・肯定が前提となっている。

以上、3～5の分析から、基本的に「なら」は相手（聞き手）の発話内容をうけるということがわかった。そして、相手（聞き手）のその発話内容が、話し手の「なら」につづく内容を発話する動機づけ、あるいは「なら」につづく内容を引きだすものとなっており、このような談話における関係のなかで「なら」は使用されている。このことは、(15) のような「なら（だったら）」につづく内容が発話されない用例からも確認することができる。

(15) リカ 「…正直、私,」「孤独な女の子の 気持ちとか、全然 わかんないよ。」

編集者 「…そっか。」「それは書く前から 気づいてたの？ それとも……」

リカ 「…前から。」

編集者 「たしかにリカちゃんなら キャラを絞らなくても 構成できたかもしれない…」
「ごめんね、私のアドバイスが 悪かった…」「でもね、だったら——」

リカ 「うん だから,」「次は ちゃんと ぶつかる。」「言いたいこと 言う。でも、
私のこと 嫌わないで。」 (響～小説家になる方法～)

(15) では、編集者の「だったら」はリカの「…前から。」(波線部分) という発話をうけている。

しかし、編集者は「だったら」以降を発言していない。一方、リカは「だったら」のつづきの内容を予測し、「うん、だから、」「次はちゃんとぶつかる。」「言いたいこと言う。」(二重線部分)と発言している。こうした対話が成り立つのは、対話の参加者が「なら(だったら)」が用いられる談話のパターンがどのようなものであるか認識しており、それにより「なら」のあとにどのような内容がつづくのか予測できるためである。

6. 「それなら」との対照から

この節では接続詞の「それなら」との違いについて考えたい。三上章(1955: 183)や庵功雄(1996: 84)では、「それなら」⁹の「それ」の有無にかかわらず、つまり接続詞の「それなら」と「なら」の意味は変わらないと述べられている。この点について考えることにする¹⁰。

(16), (17)の「それなら」は、相手(聞き手)の発言(波線部分)をうけて用いられている。「それなら」は3でみた「なら」と同じ談話パターンとなっており、「それなら」は「なら」におきかえることができる。

(16) ハルヒ 「迷惑かけたのは 謝りますけど それ以外で怒られる 意味がわかりません
間違った事はしてない!!
環 「それなら 勝手にしろ!!」「間違いを 認めるまで おまえとは 口をきかん!!
(桜蘭高校ホスト部)

(17) 祖母 「…それより先日 話した件は？」
環 「…部はやめました 藤岡ハルヒとも 今は関わりありません
祖母 「…そう」「それなら結構
(桜蘭高校ホスト部)

(18), (19)のように、「それなら」が話し手自身の発言をうける場合もある。「それなら」に先行する話し手の発言(破線部分)は、同じ話者の問いかけや確認要求となっており、このような談話パターンは5でみた「なら」の場合と同じである。しかし、この場合の「それなら」は「なら」におきかえることはできない。

(18) 瑚花 「そんなの 全然 嬉しくないわ」「…でも そっか それなら… よかったです
教師 「よかった？」
瑚花 「だって それって 私は大丈夫ってことを ずっと 証明しつづければ いいんでしょ」「それなら 私にだって できるもの！」 (私は天才を飼っている)

⁹ 庵功雄(1996: 86)では「それなら」の「それ」は具体的な対象を持たず、「それなら」全体で接続詞であると述べられている。

¹⁰ 「それなら」は、次の用例のように「それ」が現場指示の指示語として、具体物をさす場合もある。下の用例の「それ」は理央からもらったマフラーをさしている。このような「それなら」は分析の対象外である。

(i) 理央 「あ マフラー！ うれしー」
由奈 「それなら 普段づかい できるかなって」「私も 誕生日に 理央くんから もらったこれ」「いつも学校に して行けて うれしいから
(思い、思われ、ふり、ふられ)

- (19) 杉浦 「や 山田」
 山田 「杉浦さん…」
 杉浦 「——その… ずっと聞きそびれてたんだけど」「おれ 何か したかな？ それなら はっきり 言ってくれ」
 山田 「…もういいよ」 (山田太郎ものがたり)

「それなら」は、(18) では「私は大丈夫ってことを ずっと 証明しつづければ いい」, (19) では「おれ 何か したか」という話し手自身の直前の発話内容をうけている。一方で、5で述べた「なら」の場合は、相手（聞き手）が話し手の問いかけや確認要求に対して明示的に返答していないものの、相手がそれに同意・肯定したものとして、後ろの自分の発言をつづけていた。つまり、「それなら」と「なら」は、これに先行する発話が話し手自身の発話である場合に異なるふるまいをする。

接続詞が先行する文をうけるということは接続詞の基本的な特徴である。この節でみたように「それなら」はこれに合致する。一方、「なら」は接続詞としての基本的な特徴からはずれる場合があることがわかる。

ここで、(20) のナラ条件節の複文をみてほしい。

- (20) 彼氏 「お前 周りの友だちに 俺のこと さんざん グチってたんだって？ そんなに俺に文句があんなら もう別れよう」
 来栖 「は？ 何それ グチなんて 言ってないよ 何適当なこと——…」
 (この音とまれ！)

(20) では、話し手の問いかけの発話（破線部分）があり、話し手は相手（聞き手）がそれに対して同意・肯定したものとして、ナラ条件節にその同意・肯定にあたる内容をさしだしている。そして、主節の内容（二重線部分）は、その前の話し手の問いかけに相手が同意・肯定したものとして、それに返答する内容となっている。このような発話の流れは、5で述べた「なら」が用いられる文の場合と同じであるといえる。

しかし、「なら」にはナラ条件節の部分に表わされるような具体的な内容は表わされない。このことは「なら」がナラ条件節の内容部分がなくなり、接続詞へと移っていつているためであるだろう。その一方で、「なら」は、(18), (19) の「それなら」とは異なるということを述べたように、「それなら」と同じレベルでの接続詞ということもできない。

7. 「なら」の機能

3～5で「なら」が相手（聞き手）の発話内容をうけるということを確認したが、この「なら」はどのようなはたらきをしているのだろうか。

浜田麻里（1991）は、「なら」も含めた「「デハ」と類似の機能を持つ接続語」（以降、「デハ」系接続語とよぶ）を分析し、これらの語が用いられる文脈の特徴として「新しい情報の入力」

があること」と「新しい知識と既存の知識の突き合せによって日常的な意味での「推論」が引き起こされていること」を指摘している (p. 29)。そして、「デハ」系接続語の本質が「新しい情報を受け取った時に生起する推論に基づく積極的反応である」と述べている。

4で「なら」につづく発言の内容は、相手（聞き手）の発話内容をうけて述べられたものであると述べたように、話し手は相手の発話内容をうけて「なら」につづく自分の発言の内容を導いており、浜田麻里（1991）が述べるとおり、「新しい情報を受け取った時に生起する推論に基づく積極的反応」を示すものといえるだろう。また、5で分析した相手（聞き手）の発話がない場合も、相手からの明示的な返答はないものの、話し手は相手が同意・肯定したものとして、それを「なら」でうけ、後ろの自分の発言へつなげていた。これも「新しい情報を受け取った時に生起する推論に基づく積極的反応」を示すものとして考えることができる。さらに、6で述べたように、条件を表わす複文であるナラ条件節の複文の場合と同様の解釈が「なら」が用いられる文でもみられるという点も、「推論」が引き起こされている証左となっているだろう。

しかし、そもそも話し合いの場面とは、話し手と相手（聞き手）がそれぞれ発話することで対話が進んでいくもので、通常、話し手は相手の発話に対して適切な返答をするために相手の発話に対して、なんらかの推論を行なっている。この点を考えあわせると、「なら」は、「なら」につづく内容が推論によるものだという点を積極的に示しつつ、相手がそのような内容の発言をしたことが「なら」につづく発話内容の根拠であるということを表わし、かつ相手のその発話内容が、それをうけて発話する話し手の発話の動機づけ、そして発話内容の条件やきっかけとなっているということを表わすはたらきをしていると規定できるだろう。これは、4で(9)を例にして述べた「なら」につづく発話の内容は「なら」がうける相手の発話の内容が異なれば別の内容になる、ということとも対応する。

そして、5で分析した相手（聞き手）の発話がない場合に関しても、5で「なら」の使用には相手の同意・肯定が前提となっていると述べたように、話の流れ（文脈）や相手の態度・様子などから、相手が同意・肯定しているという内容の発話をしたものとして発言をつづけており、やはり相手の発話内容が話し手の発話内容の条件やきっかけとなっていることを表わすはたらきをするものであると考えることができる。相手（聞き手）の発話がない場合に関しては、場合によっては、相手がそのような（同意・肯定の）態度を示したことを根拠とし、その態度が話し手の発話の動機づけ、そして発話内容の条件やきっかけとなっていることもあるだろう。

8. 「なら」につづく文に表わされることから

「なら」につづく文にはどのような内容が表わされているかをみていく。4で述べたように、相手への命令、許可、念押し、話し手の意志やコメントが表わされている。ほかに、依頼（21）、誘いかけ（22）、勧誘（23）、話し手の希望（24）が表わされているものがあつた。

- (21) 夜明 「あの一 千秋さん」
 千秋 「あ？」

- 夜明 「パンツ 見えちゃっただけど」
 千秋 「見物料」
 夜明 「えー なら もっと 色っぼいので 頼むよう! 元キャバとは 思えない 手
 抜きぶり」 (Op—オープ 夜明至の色のない日々)
- (22) ニコ 「お兄ちゃん」
 兄 「ニコ」
 ニコ 「ぐーぜん! 帰り?」「だったら 一緒 帰ろ!」
 兄 「ああ」 (町田くんの世界)
- (23) 練馬 「とにかく! これから殿大に結果を見に行くんだろ?」「なら さっさと 出発し
 よーぜ!」 (ヤンキー君とメガネちゃん) (= (12))
- (24) そめこ 「そめこ この前の 放送見て 思ったんだよ そめこは頭ワルイから ちょっ
 としか わからなかったんだけどね あれって どんな部も 実績上げれば ヒ
 イキしないで認めてくれるってことでしょう!」「だったら あの人に 認めさ
 せたいじゃん!!」 (紅茶王子)

さらに、(25) のように対話の相手 (聞き手) に問いかける用例もみられた。

- (25) 桜川 「ちょっと 落ち着こうよ 泉くん」
 泉 「俺 落ち着いてますよ ものすごく 冷静ですよ 先生 誰か お付き合いして
 いる人いるんですか?」
 桜川 「いや いないけど」
 泉 「だったら 俺のこと 考えてもらえませんか?」
 桜川 「だめ」 (東京アリス)

この論文で分析対象としている用例は話し合いの場面であることから対話の相手 (聞き手) が存在し、「なら」につづく文は命令や依頼、勧誘、許可のような相手にはたつきかけることがらや問いかけ、そして、相手の発話内容に対する話し手の意志や希望、コメントを表わす内容となっている¹¹。

そのほかに、(26)、(27) のような話し手の不満や残念な気持ちを述べるようなものもみられた。(26)、(27) では「なら (だったら)」が相手 (聞き手) の発言 (波線部分) をうけて用いられているという点は、これまでの用例と同様である。しかし、(26)、(27) では「なら (だったら)」

¹¹ 次の用例はこの節で見たように話し手のコメントを表わしていると分類できるが、見方によれば話し手は可能性を述べているとみることもできる。話し合いの場面ではない用例も含めて、「なら」につづく文に表わされる内容をどのようにとらえるべきか、今後も考えていきたい。

- (ii) 大野 「……よしっと」「そのポスターには ちゃんとコスプレの事 書いて下さいね!」
 荻上 「なら いっその事 大野会長の写真でも 使ったほうが早いんじゃないっすか!」
 大野 「やめて下さいよ 会長なんて!」
 荻上 「……イヤミのつもりなんですけど」 (げんしけん)

につづく発言（二重線部分）に現実には実現していないことがらをさしだしており、そうしたことを述べることで話し手の不満や残念な気持ちを表わしている。

(26) 直潔 「曜太のこと 好きなんですわね」「心配しなくても 曜太は二股とか できるような器用な奴じゃないから!」

杏 「で…でもだったら 普通に話してくればいいのに!」「私 ゆきさんに 会いた
いっていったら 三神くんに「関係ないから」って 言われたんですよ!」「ゆき
さんが 男の子だったら…」「会わせてくれたって いいのに…」

(一礼して、キス)

(27) 柳沼 (映画を見終わったあと)「いや……実は 苦手なんだ 血の出るやつ」

大上 「…なら 言ってくればよかったのに 戦争ものって時点で 予想ついたらじゃん
……」

柳沼 「…君に……迷惑かけたくなかった」 (大上さんただ漏れです。)

ところで、(28)、(29) に示すように、蓮沼昭子 (1985)、前田直子 (2009) に従属節は事実で、主節のみが現実とは反対のことがらをさしだすナラ条件節の複文の用例があがっている。(28)、(29) と先にあげた (26)、(27) とには共通性があることについて述べたい。

(28) 「東京へ来ていたのなら、教えてくれば案内ぐらいしてあげたのにね」

(蓮沼昭子 1985: 72)

(29) 「いいお店ですね。ちっとも知りませんでした。明子さんのお店なら、是非、オープンの
時に伺いましたのに…」

(前田直子 2009: 46)

蓮沼昭子 (1985)、前田直子 (2009) をみると、(28)、(29) はいわゆる「反事実的条件文」として位置づけられている¹²。なお、タラ条件節やバ条件節の複文で表わされる「反事実的条件文」は (30)、(31) のように従属節に現実とは反対のことがらをさしだし、主節のことがらも現実とは反対のことがらとなる。先にあげた (28)、(29) のような、従属節は事実で、主節のみが現実とは反対のことがらをさしだす複文はナラ条件節の複文でしか表わすことができない¹³。

(30) 水谷 (病院のベッドで点滴をしている宏をみて)「元気?」

宏 「元気だったらここにいませんよ」 (トイレのピエタ)

(31) 津崎 「私が対処を誤りました。もっと早く三宅さんと話をして、然るべき手を打っていれば、こんな事態にはなりませんでした」 (ソロモンの偽証 前篇・事件)

¹² 前田直子 (2009) では「事実的な反事実条件文」とよんでいる。

¹³ ナラ条件節の複文は、次のようなタラ条件節やバ条件節におきかえることができる「反事実的条件文」にも用いられる。

(iii) 徳江 「みんなそう思ったはずよ。本当に神様がいるなら、つかまえてなぐってやりたいようなことが
たくさんあったもの」 (あん)

(26), (27) を含む, この論文でみた「なら」が用いられる文は, 相手 (聞き手) の発話内容をうけて述べられており, こうした点は先行研究のいわゆる「事実的条件文」にみられる特徴でもある。一方で, 蓮沼昭子 (1985), 前田直子 (2009) であげられている (28), (29) はこれまで「反事実的条件文」とよばれ, 仮定的な条件文との関連でみられてきた。しかし, 従属節に事実をさしだし, 主節に現実とは反対のことがらをさしだすという点は, (26), (27) で確認した内容と同様の関係である。つまり, (28), (29) についてもいわゆる「事実的条件文」との関連においてとらえることができるものと考えられる。さらに用例を採集して, 今後も考えていきたい。

9. おわりに

この論文では, 「なら」の前に句や語をとみなわない「なら」が用いられる文について分析を行ない, 次のことがわかった。

「なら」は相手 (聞き手) の発話をうける。そして, 相手 (聞き手) のその発話内容が, 話し手が発話をする動機づけ, あるいは「なら」につづく内容を引きだすものとなっており, このような談話における関係のなかで「なら」が使用されることがわかった。つまり, 「なら」は, 「なら」につづく内容が推論によるものだという点を積極的に示しつつ, 相手がそのような内容の発言をしたことが「なら」につづく発話内容の根拠であるということを表わし, かつ相手のその発話内容が, それをうけて発話する話し手の発話の動機づけ, そして発話内容の条件やきっかけとなっていることを表わすというはたらきをしている。

話し手の問いかけ・確認要求に対して相手 (聞き手) の返答がない場合, あるいは返答を待たずにつづける場合は, 話し手は相手が同意・肯定していることを「なら」でうけて, 後ろの自分の発言をつづけていることがわかった。相手からの明示的な発話はないものの, 相手が同意・肯定したことを前提とし, そのことが話し手の発話の動機づけ, そして発話内容の条件やきっかけとなっている。

接続詞「それなら」との対照からは, 「それなら」と「なら」は先行する発話が相手 (聞き手) のものではなく話し手自身の場合に, 「それなら」はその話し手自身の発話内容をうけるが, 「なら」はうけないという違いがあった。このことから, 「なら」が接続詞として「それなら」と同じレベルにはないということがわかった。

「なら」につづく内容には, 命令や勧誘, 許可のような相手にはたらきかけることがらや問いかけ, そして相手 (聞き手) の発話内容に対する話し手の意志や希望, コメントを表わす内容, 話し手の不満や残念な気持ちを述べる内容がみられた。この点はさらに分析を進める必要があるが, 「なら」が相手 (聞き手) の発言をうけて, それに対する返答を述べる文に用いられるということを見ると, 相手への返答となっていれば「なら」につづく内容に大きな制約はないのではないかと考えている。

さらに, 分析を通じてナラ条件節の複文についても言及した。先行研究では 8 の (28), (29) のような文は「反事実的条件文」として「仮定性」をもつ複文との関連で扱われてきたが, 本稿

の分析でみたように、(28)、(29) のナラ条件節のことがらは事実であることから、いわゆる「事実的条件文」の1つとして考えることができることを述べた。

この点に関して、(32) のナラ条件節の複文も、「ただいま～」と帰ってきた息子に対して、「帰ってくるなら」と発言しており、ナラ条件節の「帰ってくる」ということがらは未来時のことがら(=仮定)ではなく、話し合いの場のことがら(=事実)としてさしだされているとみることができることを指摘したい。

(32) 透「ただいま～～」

母「あら 透? どうしたの 帰ってくるなら メールくらい しなさいよ～～
(ライアー×ライアー) (= (5))

さらに、(28)、(29)、(32) について、本稿で分析した点から考えると、他論文から引用した(28)、(29) にはナラ条件節の複文があるのみで相手(聞き手)の発話が示されていないが、これらも相手が発話した内容をうけて発話されたものだろう。(32) も「ただいま～」という相手の発話内容をうけて、ナラ条件節の複文が述べられている。(32) は1であげた(5)である。1では主節のことがらが従属節のことがらに対して先行するような時間関係となっており、ナラ条件節の複文でしか表わせない用例としてあげていたが、(32) のような文も本稿でみた相手(聞き手)の発話をうけるという点からとらえることが可能である。

先行研究において、ナラ条件節に相手(聞き手)の発言した内容がさしだされることを指摘する研究は以前からもあるが(久野暲 1973, Akatsuka 1983 など)、ナラ条件節の複文の全般にわたってこの点を考える研究はない。本稿の「なら」の分析の観点や結果は、これまで他の条件節の複文との対照のなかでとらえられてきたナラ条件節の複文を別の点からとらえ直し、その全体像を考えるうえでの手がかりとなるのではないかと考える。今後はナラ条件節の複文についての分析も進めていきたい。

参考文献

- 有田節子 (2016) 「日本語教育における (ノ) ナラ条件文の扱いについて：認識的条件文の重要性」 *Studies in Language Science* 6: 13-23, 立命館大学大学院言語教育情報研究科。
- 庵功雄 (1996) 「指示と代用：文脈指示における指示表現の機能の違い」『現代日本語研究』3: 73-91, 一橋大学。
- 久野暲 (1973) 『日本文法研究』東京：大修館書店。
- 鈴木義和 (2015) 「事実的条件文について」『神戸大学文学部紀要』42: 27-46, 神戸大学文学部。
- 高橋太郎・金子尚一・金田章宏・齋美智子・鈴木泰・須田淳一・松本泰文 (2005) 『日本語の文法』東京：ひつじ書房。
- 蓮沼昭子 (1985) 「「ナラ」と「トスレバ」」『日本語教育』56: 65-78, 日本語教育学会。
- 浜田麻里 (1991) 「「デハ」の機能：推論と接続語」『阪大日本語研究』3: 25-44, 大阪大学文学部日文学科(言語系)。
- 前田直子 (2009) 『日本語の複文—条件文と原因・理由文の記述的研究—』東京：くろしお出版。
- 三上章 (1955) 「代名詞と承前詞」『現代語法新説』刀江書院(東京：くろしお出版から1972年に復刊)。
- 宮部真由美 (2015) 『現代日本語の条件を表わす複文の研究—ト条件節とタラ条件節を中心に—』京都：見洋書房。
- Akatsuka, Noriko (1983) Conditionals. *Papers in Japanese Linguistics* 9: 1-33.

例文出典

・マンガ

講談社：金田一蓮十郎『라이어×라이어』, 木尾士目『げんしけん』, 稚野鳥子『東京アリス』, ニノ宮知子『七つ屋志のぶ宝石匣』『のだめカンタービレ』, 森永あい『山田太郎ものがたり』, 吉河美希『ヤンキー君とメガネちゃん』, 吉田丸悠『大上さんただ漏れです。』, ヨネダコウ『Op—オープン—夜明至の色のない日々』

集英社：アミュー『この音とまれ!』, 安藤ゆき『町田くんの世界』, 椎名軽穂『君に届け』, 咲坂伊緒『思い, 思われ, ふり, ふられ』, 中原アヤ『ダメな私に恋してください』

小学館：加賀やっこ『一礼して, キス』, 最富キョウスケ『電撃デイズ』, 七尾美緒『私は天才を飼っている』, 柳本光晴『響～小説家になる方法～』, わたなべ志穂『王様に捧ぐ薬指』

祥伝社：町麻衣『アヤメくんののんびり肉食日誌』

白泉社：葉鳥ビスコ『桜蘭高校ホスト部』, 山田南平『紅茶王子』

・シナリオ

河瀬直美「あん」『15年鑑代表シナリオ集』（日本シナリオ作家協会編）

松永大司「トイレのピエタ」『15年鑑代表シナリオ集』（日本シナリオ作家協会編）

真辺克彦「ソロモンの偽証 前篇・事件」『15年鑑代表シナリオ集』（日本シナリオ作家協会編）

Analysis of ϕ *nara*: Contrast with *nara*-Conditional Clauses

MIYABE Mayumi

Naruto University of Education

Abstract

In this paper, we analyzed instances of *nara* that do not constitute a clause. The word *nara* indicates that the content following it is based on inference, whereas the basis for the subsequent content is the listener's utterance. Additionally, *nara* shows that the substance of the listener's utterance motivates and conditions that of the speaker.

If the listener fails to respond to the speaker's question or confirmation request, or if the speaker continues without waiting for an answer, the speaker assumes that the listener agrees with or affirms the request, receives it with *nara*, and continues to the next statement.

In contrast with the conjunction *sorenara*, a difference was observed between *sorenara* and *nara*, where the preceding utterance is not of the listener but the speaker. While *sorenara* receives the meaning of the speaker's utterance, *nara* does not. Hence, we found that *nara* as a conjunction is not on par with *sorenara*.

Keywords: *nara*, *nara*-conditional clauses, factual conditional sentences, conjunctions